

## 宮城県南三陸町における神社の立地特性の把握とその歴史的背景に関する考察

Historical Study on Geographical Features of Shrines in Town of Minami Sanriku, Miyagi Prefecture

遠藤 賢也\* マゼレオ みほ\*\*

Kenya ENDO Miho MAZEREUW

**Abstract:** The Great East Japan Earthquake on March 11th 2011 was followed by an unprecedented tsunami which devastated the Tohoku coastline. There were several cases where residents had to seek shelter at even higher locations than designated evacuation shelters; for many this was the local shrine. This research analyzes the geo-spatial pattern of shrines along Sanriku coastline and examines the factors that influenced their locations by unfolding region's history in order to make the argument for shrines being incorporated into future disaster preparedness schemes. Town of Minami Sanriku had 56 shrines along its coast, of which 14 were within the inundation zone. Despite their proximity to the shoreline, average elevation of the shrine was approximately 23.7m above sea level. Geographical analysis uncovered that topographical features surrounding each shrine defines its potential for evacuation. Historical research has suggested that topographical features of shrines were underpinned by the local history of fortresses erected at higher grounds during the medieval era, and shrines with a proximity to fortresses tended to be safe from tsunami inundation. The devastating tsunami provides an opportunity to rethink the relationship between topography and cultural spaces to double as evacuation areas embedded within history, culture and traditions of the region.

**Keywords:** *shrine, geographical feature, history, tsunami disaster prevention, The Great East Japan Earthquake*

**キーワード:** 神社, 立地特性, 地形, 歴史, 津波防災, 東日本大震災

### 1. 研究の背景と目的

2011年3月11日に発生した東日本大震災後の津波からの避難場所として、神社が果たした役割は注目に値する。低平地部に位置していた家屋や商店、一部の学校施設が被災する中において、高台に鎮座する神社の多くが大きな被害を免れ、社屋や社殿が数日から数か月にわたって避難場所あるいはボランティアや自衛隊の救援拠点として多くが活用された。例えば、南三陸町戸倉・折立地区にある五十鈴神社には保育園児および小学児童109人を含む地区住民190人余りが避難し、一夜を明かして難を逃れた<sup>1)</sup>。神社には資源力(備蓄用食糧・広い空間)、檀家を中心とした人的力、そして安寧を与える宗教力があり、岩手・宮城・福島の3県において約4分の1の神社が避難所として利用されたと推定されている<sup>2) 3)</sup>。

こうした実際の出来事は、被災地域の地形と、当該地域の歴史性および文化性を象徴する空間である神社との関係性を再考するきっかけになったといえる。地形は津波の遡上高を規定する物理的な障壁であることを踏まえ、神社を含む高台を防災計画へと援用することの有用性がすでに指摘されている<sup>4) 5)</sup>。そのためには、避難場所としての潜在性を有する神社周辺の地形条件を実証的に、かつ詳細に理解することが必要となる。しかしながら、関連する既往研究では、震災時に避難場所となった神社内での活動<sup>6)</sup>や避難経路に関する研究<sup>6) 7)</sup>があるが、個別事例の把握に留まり、体系的な検証を行うまでには至っていない。

地形と神社との関係性の理解において、本研究では各神社を中心とする局所的な地形条件に着目する。神社の立地特性について論じる既往研究では、斜面地<sup>8)</sup>や断層<sup>9)</sup>、周辺景観<sup>10)</sup>といった自然環境との相関性が明らかにされてきた。そうした広域的かつ、網羅的な検証に対して、被災地である三陸沿岸地域の地形的特徴を踏まえ、本論では神社の立地特性をより細かく縮尺から個別に捉えることを試みる。

以上の背景を踏まえ、本研究では東北三陸沿岸地域の神社の立

地特性を地形条件という観点から詳細に明らかにし、その因果について地域の歴史的背景との関連から考察することを目的とする。最後に今後の防災計画を展望する上で、神社の持つ立地特性が果たしうる防災上の役割についての考察を行った。

折しも、防潮堤建設、高台移転などハード面における復興への具体的な計画が徐々に明らかになる現状に対して、地域を特徴づける地形と、そうした自然環境を受容しながら形成してきた歴史・文化的な営みとの関連を理解することは緊急を要する課題である。こうした検証を通じてはじめて、地域社会を再建するのに不可欠なソフト面における復興への議論が可能となる。

### 2. 研究対象地

宮城県北部に位置する本吉郡南三陸町は、津波による被害の最も大きかった自治体の一つであり、かつ東北三陸沿岸特有の鋸歯状の山地状地形と入り組んだ海岸線を顕著に併せ持つ。典型的なリアス式海岸地形を有する同町は、古くから津波被害を繰り返し経験し、多大な被害を蒙ってきた。そのため沿岸部には水門、一部高さ5.4mにおよぶ防潮堤が設置されるなど、津波被害に対する備えが充実していた。海岸線に沿って点在する小さな入り江ごとに漁港があり、“浜”と呼ばれる小さな集落が展開され、コミュニティの最小単位を構成する。こうした集落の最大のが町役場や防災庁舎のおかれていた志津川中心部であり、歌津・伊里前地区がこれに続き、海岸部に位置するわずかな低平地に形成された市街地が、とりわけ震災時に深刻な被害を受けた。南三陸町は、震源地から約130kmの距離にあり、地震発生から30-40分後に津波が到達した。町内の60%以上の家屋が全壊および半壊の被害を蒙った<sup>11)</sup>。津波の高さは志津川中心部でおよそ14-16m、歌津伊里前で13-16mであったことが推定されている<sup>12)</sup>。なお、本研究では、浜と呼ばれる海岸線沿いの集落における神社とその被災状況に焦点があるため、内陸部に位置する入谷地区を除き、志津川・歌津・戸倉の3地域(以下、町内沿岸部)を対象地とする。

\*アトリエ・ドライザイテル・アジア \*\*マサチューセッツ工科大学 建築学部

### 3. 神社の地形的立地特性の把握

#### (1) 方法

対象地における神社の立地と地形との関係性を明らかにするために各種地図データを重ね合わせた。地形の把握にあたっては国土地理院発行の数値標高モデル(10mメッシュデータ)を用いた。神社の正確な位置及び面積を把握するためには、震災以前の町の様子が細部までうかがえるゼンリン住宅地図南三陸町2011年3月、津波による浸水位置の把握には、原口らによる津波詳細地図<sup>12)</sup>および2011年より毎年夏に実施した現地踏査をもとに、作成を行った。GISソフトウェアQGIS(QGIS Development Team社)を用いて基盤図を作成し、3DソフトウェアRhinoCross4.0(Robert McNeel & Associates社)を用いて神社個々の周辺地形条件を3次元化し、分類を行った。分類に際し、神社を中心とした直径100mの空間を対象とし、最も標高の最も高い地点E1、低い地点E2、それぞれ地点間の傾斜(平均勾配A)を求め、図-1のようにAからDの4分類とした。

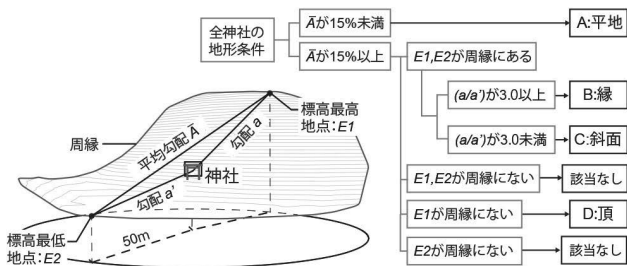


図-1 神社を中心とする地形条件の分類に関する模式図

#### (2) 結果

図-2は南三陸町内の地形と津波浸水地域、そして神社の分布、発見されている館跡の位置を示している。また、神社周辺の地形条件をもとに、神社の属性(被災率、平均標高、平均社屋面積、および海岸からの近接性、すなわち沿岸から100m以内の立地率)、および標高別分布数をまとめたのが表-1と図-3である。

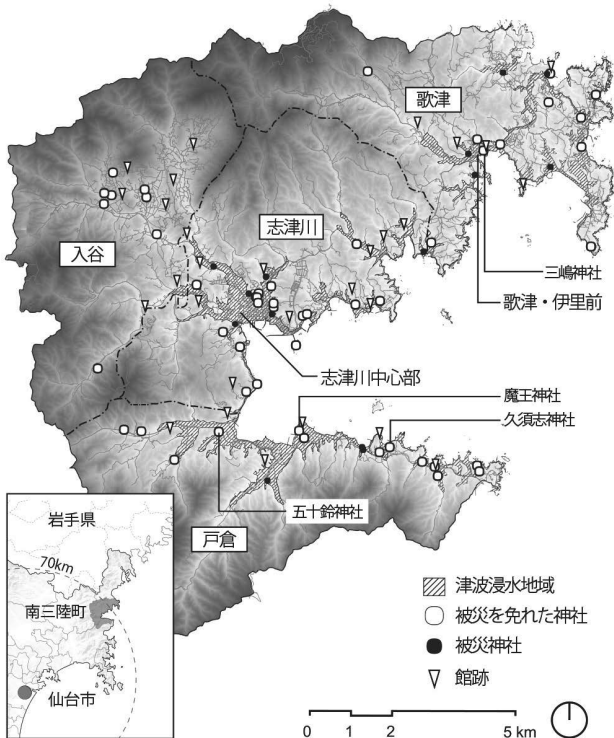


図-2 南三陸町の地形と被災・非被災神社の分布

震災以前、町内沿岸部には大小56の神社が位置していた。そのうち津波浸水域内の神社の数は14ヶ所、その全ての標高が海拔15m以下であることが分かった。現地踏査の結果ともあわせ、神社の多くが低平地部の居住地域と近接性を持ちつつ位置していることが見て取れた。全神社の平均標高は海拔約23.7mで、こうした高台に位置する神社が南三陸町においても、津波から人々の命を守った。190人余りが避難した戸倉・五十鈴神社に加え、戸倉久須志神社37人、歌津・三嶋神社では16人、町による避難所指定の有無に関わらず、地域住民が緊急避難をし、一晩を過ごしたことが報告されている<sup>13)</sup>。

また、神社と海岸線からの距離を求めると、73.2%(41神社)が海岸線から500m以内(うち被災は10神社)、32.1%(18神社)が100m以内(うち被災は5神社)の範囲に位置していた。これら結果は、被災の有無と海岸線からの距離とに明確な相関が少ないこと、また町内沿岸部の急峻な地形条件を反映していることを示唆している。

表-1 神社の立地する地形条件ごとの属性分類

地形タイプ	神社数	被災率 (%)	平均標高 (m)	平均面積 (㎡)	沿岸近傍 (%)
A: 平地	12	58.3	13.3	17.1	25
B: 縁	9	44.4	21.6	31.4	11.1
C: 斜面	25	12.0	26.5	46.0	37.5
D: 頂	10	0	30.2	54.2	50
全	56	25.0	23.7	40.5	32.1

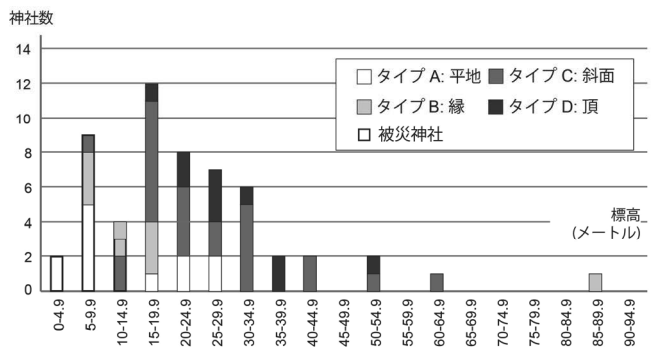


図-3 神社の標高別分布数および地形条件による4分類

表-1、図-3より、被災神社の半数が地形タイプA、すなわち「平地」に分類された。タイプAは被災率が約6割にのぼり、平均標高が4分類で最低である。同様に、社屋面積が平均して最小であることを踏まえると、小規模な社あるいは祠が大半であったことが推測される。ゼンリン住宅地図より、それらが一般家屋・商店と市街地内で混在していた様子がうかがえた。次に多く被災した神社はタイプB;縁、すなわち神社が平地と丘陵地の境に位置しているタイプである。市街地の縁辺部に位置し、山の斜面に沿って参道および鳥居があるタイプで、赤い鳥居が居住地域内から際立って視界に入るように設置されている。タイプC;斜面、は全神社の半数近くが分類されるタイプで、勾配が15%を超える斜面に神社が立地していることを示す。長い上り階段の参道と社殿の背後に山並みが続く在り様が町内の神社周辺の地形の典型であると考えられる。全分類で最大の平均社屋面積を有し、また市街地の近傍に位置していたがために住民たちの避難場所としての性格を示したのがタイプD;頂である。緊急時に津波避難者を受け入れた先述の3神社は全てこのタイプに属する。タイプ

Dは全ての神社が被災を免れたにもかかわらず、4分類中海岸線からの近接性が最も高い割合を示した。すなわち、海岸沿いの小高い丘や岬状の地形上に選択的に勧請された神社である可能性が示唆された。また津波襲来時の避難地としての潜在性をうかがわせる立地特性であると考察できる。

比較検討のために、町指定の避難場所の平均標高を町内沿岸部について同様の手法で求めると海拔約20.4mであった<sup>14)</sup>。これらの避難場所は2006年12月に指定されたもので、学校や集会所、寺社など主に公共施設が割り当てられた。町内沿岸部全67ヶ所のうち、34ヶ所が津波の被害を受けたことが報告されている<sup>11)</sup>。

以上、南三陸町沿岸部における神社の立地特性を地形という観点から分類し、概観してきた。震災後の避難行動を裏付けるように神社の標高は一概に高いことが示されたが、一方で神社周辺の地形条件によってその被災率や標高、神社の持つ属性が大きく異なることが示された。次章では神社がこうした立地特性に至った背景を歴史的史実と照らし合わせながら考察していく。

#### 4. 神社の立地特性に関わる歴史的背景

##### (1) 方法

町内沿岸部の神社が現在の位置に立地するに至った歴史的背景を把握するために、町史および各種歴史資料を収集し、参照した。また3章同様、歴史地図をGISに取り込み、現在の地形、神社の立地との重ね合わせを行い、歴史的事項との関連を調べた。さらに、町内沿岸部3地域それぞれの神社の禰宜さん、神主さん、町の歴史に造詣の深い地元有識者を2011年より複数回訪問し、神社の由来や地域における役割・関わり方の変遷、震災直後の状況について聞き取り調査を行い、考察時の補足資料として用いた。

##### (2) 結果

##### 1) 戦国期：館の構築と武家階級による神社の勧請

1189年における源頼朝の奥州征伐後、封建社会が全国的に確立するに伴い、関東方面から領地経営のため、多くの武士団が東北地方に移住し開田をはじめた。こうした武士団の一部が戦国動乱の時代を経る中において、次第に幕府の監視の目を逃れ、在地豪族として独立していくこととなる<sup>15)</sup>。とりわけ、東北地方は地理的に中央政府から遠い存在にあり、幕府の影響力が及びづらく、そのため移住してきた豪族は、各自の領地を自身の力で防衛する以外に方策がなかった。こうした歴史および地理的背景から、最も政情が不安定だった南北朝時代(1336-1392)頃より「館」と呼ばれる自衛のための軍事拠点が登場しはじめる。武家社会の確立に伴い、館や城といった軍事拠点の建設は全国的な傾向といえるが、特に東北地方には多く建設された。初期の開発形態ともいえる、館の大きさは様々であり、10haを超える大規模な志津川・朝日館や歌津・臥牛館に対して、0.1ha程度の小規模な出城のようなものまで存在した。屋敷は斜面地を開削した狭隘な平地に建てられ、多くの家臣等は館の周辺の耕地に居住していた<sup>16)</sup>。

南三陸町内29ヶ所に残る館跡の建設された立地特性を現在の地形との関連からみていくと(図-1)、平野部を見渡すことのできる斜面地や、河口部・海上の様子をうかがい知ることのできる岬状の地形が選択的に選ばれていたことがみとれる。例えば志津川の小森館や要害館などは海拔50mを超える高台に位置していたとみられ、急峻な斜面の眼下には、震災以前宅地や田畑となっていた低地部一帯が広がる。かつて、河口域や河川沿いの広い空間には湿地帯が形成していたとされ、館が自然の要害としてそういった湿地を利用していたことも推測できる。他方で、戸倉・松崎館や若宮館のように海に突き出した岬地形上に作られたものも多く存在する。こうした地形が選ばれた背景には、急峻な三陸沿岸の陸路に対して、海路からの侵入を企てる水軍に対しての防備といえる。

館には軍事拠点としての役割と同時に、敷地内やその周辺には宗教施設も併設されていた。結果的に、町内各地に残っているほとんどの館跡の近くには寺院や神社が存在することとなった。それは戦国時代という、明日の命も保証されない時代を生きる人々が生命の安全と後世を祈って、その館主によって勧請されたためであると考えられている<sup>15)</sup>。関東武士が東北地方に移住する際に、彼らが信仰する故郷の神社や寺院、および神官や僧を共に引き連れてきた。こうした経緯により、例えば、武神として全国の武士の間に信仰された八幡信仰や海上安全祈願を目的とした鹿島信仰、あるいは修験道に關係する熊野信仰といった全国各地の信仰が東北地方に伝わることとなる。南三陸町内には、戸倉の魔王神社や歌津・伊里前地区の三嶋神社のように、かつて館があった場所に現在も神社が建立されているという事例がある。政情の安定化した藩政期を迎え、館の本来の役割が形骸化されていく中において、宗教施設としての役割が残し、そのまま引き続き今日にまで至った例と考えることができる。

##### 2) 館跡と神社の立地との関係性

町内沿岸部に含まれる22の館跡と震災前建てられていた56神社の位置関係を重ね合わせ、館跡からの一定距離内に含まれる神社数を示したのが図-4である。図より館跡から半径100mの範囲内に4神社(7.1%)、500m以内では23神社(41.0%)が含まれることが明らかとなった。一方で、館跡から500mの距離に含まれない神社数も33あり、必ずしも館跡と神社の立地が対応していないことも見て取れた。また、3章同様に各4地形条件による分類を行った結果、館跡近くにはタイプC;斜面やタイプD;頂の占める割合が総じて高いことが示された。すなわち、館跡に近い神社ほど、大きな社屋を持ち、標高が高く、被災率の低い傾向にあることが分かった。神社個々の云われや由緒が度重なる津波被害によって、判然としないことが多いなか、本結果から館跡に近く、タイプCやタイプDに分類される神社は概して歴史が古く、災害被害の少ない地形条件を選定して勧請された経緯があることが示唆された。

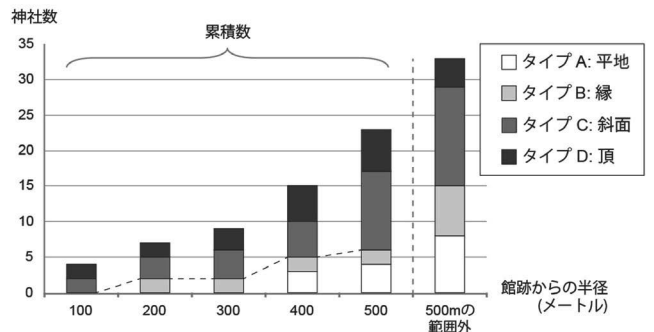


図-4 館跡と震災以前の神社との位置関係

館跡と神社の立地には一定の距離的関連はみられたものの、残りの33(59%)の神社に関しては、その相関が不明確であった。この点に関して、その理由を以下2点挙げる。

##### i) 館と浜の市街地域との空間的なずれ

館の立地していた地点は現在の市街地域よりもさらに内陸に位置している傾向にある。例えば、志津川中心部を取り囲む3つの館(朝日館、新井田館、小森館)は海岸線から約1-2kmの距離があり、市街地内および周縁部に位置する神社からも離れている。志津川中心部の町割りが形成されたのは17世紀中期であり、それ以前は八幡川・水尻川・新井田川の3河川が海へと注ぐ河口域をなしていた。そのため一帯では湿地帯が形成されており、現在に比べて水際線が深く内陸へ入り込んでいたことが推定されている。中世以降、土地の開墾や山林を伐採する過程において、徐々

に土砂が流出し、河口域に堆積した結果、現在の市街地の基盤を形成するに至った<sup>15)</sup>。すなわち、時代が下って河口域に土地が造成され、館から離れた位置に新市街地、そして付随するように神社が新たに勧請されたことから、両者の位置にずれが生じたものと考えられる。そのことを示唆するように、市街地内やその縁辺部に卓越するタイプ A；平地やタイプ B；縁が、図-4 の結果より、館跡周辺に少ないことが見て取れる。あるいは、同様の視点から、館跡近くに位置していた神社が新しい市街地近傍へ移動した結果として考えることもできる。こうした一連の出来事は志津川中心部のみに限らず、町内沿岸部一貫して似たような地形的特徴を有し、また海岸線に沿って館跡が点在する点を踏まえると、他の浜においても同じような作用が生じたものと考えられる。

## ii) 浜の発展に伴う新たな神社の勧請

江戸藩政期以降、東北の地も政情が安定化すると、浜ごとに多くの神社が新たに勧請された<sup>17)</sup>。その背景には、村・町という共同体の誕生があり、神社は集落内の結束を固めるための重要な役割を担った。古くから半農半漁の生活形態を営み、年間を通じて生業に勤しむ住民らが定期的にか所に集い、集会や祭りを主宰する立場として、神社や神主が位置づけられていた。それゆえ、各浜に神社が必要となり、住民主導で積極的に勧請された。その結果、中世期の館とは無関係の神社が、各浜の発展と共に新たに建てられたこととなる。新たな神社の勧請に際して、日本人は古来より、自らの生活空間の中から神聖感の強い場を選んで神々の座と定め、信仰の対象としてきた<sup>18)</sup>。なかでも盛り上がった地形は土地精霊がこもる場所として認識され、町の近傍がかつ周縁部に位置し、山容が目立ち、木々が鬱蒼と生えた場所が選ばれてきた歴史をもつ<sup>19)</sup>。多くの東北地方の人々が古くは関東地方をはじめ、全国各地からの移住者であったことを踏まえると、こうした全国的に共通する地形と信仰に関わる理念が近世の東北地方にも当てはまることは十分妥当であると考えられる。以上の史実を踏まえると、町内沿岸部には、中世期の館に関連性をもつ神社と藩政期の住民主導で勧請された神社とが混在することとなったと考察される。

## 5. まとめ

本研究では、宮城県南三陸町沿岸部に位置する神社の立地特性について、地形的側面、そして歴史的側面の双方から検証・考察を行ってきた。高台に位置する神社が多くの人々の避難場所になったという事実は広く知られていることであるが、本研究ではさらに詳細な分析を行うことによって、神社周辺の地形条件に応じた、その被災率や標高などの特性が大きく異なることが示された。またそうした立地場所を規定した背景には、三陸沿岸部特有の歴史的・地理的背景を理解する必要があった。すなわち、まず中世戦国期において、地の利を生かした軍事拠点、館の建設に付随する形式で神社は勧請された。それらはとりわけ見晴らしの利く斜面地や沿岸部に近い岬状の丘陵が好んで選ばれた。次に、江戸藩政期以降になると、浜の発展とともに、住民による新たな神社の勧請がもたらされた。それらの立地場所の多くは、元来河口域に位置していた低平地部内やその縁辺部であったとみられる。こうした二つの異なる時代背景に裏打ちされた神社の立地特性は、津波被害の有無や避難場所としての役割といった側面で、顕著な差異を示す結果となった。

## 6. 計画論への展望と今後の課題

避難に関わる計画論は、今後の南三陸町の人々の生活を支えるものであり、かつ地域の観光業を推進していく上でも不可欠な要素である。東日本大震災後に神社が果たした役割を再確認すると、居住地域に近く高台に位置し、人の行き来が定期的であり、

また参道がすでに整備されている点を踏まえると、神社は避難場所として恰好の立地であると考えられる。さらに、地域の歴史・文化性の象徴である神社は浜に生活する人々の日常風景の中であり、こうした地域性を代弁する場所を津波防災、そして避難という現代的な課題との兼ね合いから積極的に活用していくことの有用性について今後検討する余地がある。しかし一方で、本研究では、神社周辺の地形条件の把握や勧請に関わる歴史的な背景を理解することの重要性を合わせて指摘した。全ての神社が一様に避難場所に適しているわけではなく、地形的条件に従って、その潜在性が大きく左右されることが示された。また避難に適した神社には相応の歴史的背景を伴うことを本研究では明示した。以上のように、東日本大震災直後に神社が避難場所として機能した教訓を、地形と歴史という観点から詳細に検証してはじめて、今後の防災計画を展望する上での有効な知見となりうる。

しかしながら、刻一刻と進展する復興事業において、本研究で提示した視点がいかに実際の計画に適用できるかについての具体的な検討は十分にはできなかった。今後は、地域住民や地元神主さんらの意向を把握しながら、ハードとソフト両側面の復興をいかに効果的に関連させ、災害に強いまちづくりを展開していくかの議論が研究課題となる。

## 謝辞

本研究を進めるにあたって、南三陸町にお住いの小野寺弘氏、工藤真由美氏、佐藤正典氏、さらには宮城大学の平岡善弘先生には、資料収集、聞き取り調査において大変お世話になった。ここに記して感謝の意を表する。

## 補注及び引用文献

- 1) 南三陸町戸倉に所在する、折立契約講 (2012) による東日本大震災記念碑に記載。
- 2) 稲場圭信 (2012) : 東日本大震災における宗教者と宗教研究者, 宗教研究 86-2, 29-52
- 3) 糸谷正俊 (2014) : 被災地神社アンケート調査報告 : 社叢学研究 特集号 シンポジウム 災害と社叢文化, 47-52
- 4) 藤本頼生 (2011) : 東日本大震災と神社・神職, 国際宗教研究所ニュースレター, 第 71 号, 3-7
- 5) 大窪健之 (2014) : 津波拠点として機能した社寺 : 東北学 03, 138-155
- 6) 南正昭・中嶋雄介・安藤昭・赤谷隆一 (2005) : 避難経路の高低差が津波避難者に与える負荷に関する基礎的研究 : 都市計画学会論文集 40-3, 685-690
- 7) 川邊悟史・林倫子・大窪健之 (2012) : 津波からの避難時間に着目した社寺の一時避難場所利用に関する有効性評価—東日本大震災で被災した宮城県石巻市北上町十三浜を対象として— : 歴史都市防災論文集 vol6, 157-164
- 8) 藤田直子・熊谷洋一 (2007) : GIS 解析による都市における神社・寺院・公園の立地地点の分布形態の差異に関する研究 : 景観生態学 12, 9-12
- 9) 是澤紀子・堀越哲美 (2004) : 景観としての神社の立地とみる信仰の場と自然環境の関わり—京都府伏見区福徳周辺の神社を事例として—, 都市計画学会論文集 39-3, 145-150
- 10) 日高圭一郎・有馬隆文他 (2005) : 地方における名所とされた神社の立地特性に関する研究 : 日本建築学会計画系論文集 597, 93-100
- 11) 南三陸町 危機管理課 (2012) : 東日本大震災による被害の状況について : 南三陸町ホームページ, [www.town.minamisannriku.miyagi.jp/index.cfm/17,0,21.html](http://www.town.minamisannriku.miyagi.jp/index.cfm/17,0,21.html), 14/3/8 閲覧, 14/7/2 更新
- 12) 原口強・岩松輝 (2011) : 東日本大震災 津波詳細地図 上巻, 古今書院, pp167
- 13) 葉袋奈美子 (2012) : 集落における神社の役割—東日本大震災時の津波避難行動の聞き取りより— : 日本建築学会大会学術講演梗概集, 9 月, 103-104
- 14) 町内避難場所の特定には、南三陸町建設課による南三陸町地震防災マップを参照。
- 15) 佐藤正助 (1985) : 志津川物語 : NSK 地方出版, pp615
- 16) 志津川町誌編さん室 (1991) : 志津川町誌 3 (歴史の標) : 宮城県志津川町, pp917
- 17) 宮城県史編纂委員会編 (1961) : 宮城県史 12・学問・宗教 : 宮城県史刊行会, pp717
- 18) 野本寛一 (2006) : 神と自然の景観論 信仰環境を読む : 講談社, pp289
- 19) 大場磐雄 (1970) : 祭祀遺蹟 : 角川書店, pp659